

# ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』のメモ

takaidos

ジュール・ヴェルヌ(1828-1905)。  
1864年(ヴェルヌ36歳)発行。

金子博・訳。  
1976年発行。

描写が緻密。  
著者自身、まるで行ったことがあるかのように旅行記のように記述している。  
そのためリアリティがある。  
というより、空想世界を頭の中に作り上げて、ヴェルヌ自身がある中で探検を楽しみながら書き下ろしているのがよく分かる。  
ときどき出て来るユーモラスな独り言もまさにその現れ。  
考えておいた大筋の話を進めながら、登場人物の気持ちになってその都度その都度状況に応じていろいろ考察している。

前半はアイスランドまでの旅程を地名や景色などを描写し、火口付近から鉱物学、地層学、動物学、植物学、有史以前の生物についての知識を語って、景色の移り変わり、ストーリーに厚みを加えている。

読後感も爽やか。

★★★★★

(旺文社文庫は訳者による注釈もいい。ヴェルヌの間違ひも訂正している。  
また挿絵も小説のイメージをよく表している。  
巻末のヴェルヌ代表作品の紹介、特質、年譜も揃っている。)

<目次>

地底旅行 1~45章

解説/金子博  
代表作品解題  
年譜  
あとがき

<登場人物>

オットー・リーデنبロック教授:ヨハネウム学院教授。鉱物学者。50歳くらい。短気・癩癩持ち。  
アクセル:リーデنبロックの甥。孤児だった。1844年生まれ。19歳。  
グラウベン:リーデنبロックの養女。アクセルのフィアンセ。  
マルタ:老女中。

アルネ・サクヌッセンム:16世紀の有名な錬金術師。アイスランド人。ルーン文字で暗号を残した。  
ハンフリー・デービー:地球は地下に降りるほど温度が上がり中心に近付くと高温で流動性を帯びているという説に反対。

トムスン教授:コペンハーゲンの北方古代博物館館長。ハンブルク駐在領事。

フレドリクソン:アイスランド・レイキャビクの自然科学の先生。部屋も貸してくれる。

ハンス・ビエルケ:フレドリクソン氏紹介のアイスランド人の案内人。エイデル(毛綿鴨)の漁師。デンマークが通じる。

・火山  
スネッフェルス:アイスランドの休火山。標高1500メートル。2つの峰。600年噴火していない。峰の直径2km、深さ600m。

<あらすじ>

1863年5月24日日曜日。  
ハンブルク・旧市街ケーニッヒシュトラッセ。

リーデنبロック教授が手に入れた本からアルネ・サクヌッセンムの暗号文が見つかった。  
アクセルが暗号文の読み方に気づく。  
5月25日、教授、サクヌッセンムの暗号に従ってアクセルを連れて地球の中心に行くという。  
グラウベン「私が女でなかったら…！」とアクセルの探検行きを励ます。

5月26日朝5時起きで7時発に汽車でキールへ行く。午前10時着。  
キルンで汽船エレノア号に乗って9時間、午前7時コルサー(デンマーク・ゼーラント島の西)に到着。  
コルサーから汽車で3時間、首都コペンハーゲンに到着。  
ブレット=ガーレ街のフェニックス・ホテルに宿泊。  
友人のトムスン教授が館長を務める北方古代博物館に行く。  
トムスン教授、アイスランド行きの船を探してくれる。

コペンハーゲン南西部のアマク島にある『フォル=フレルセルス=キルク教会』の鐘楼の外階段で高さに慣れる練習をさせられる。  
6月02日午前6時、小型スクーター船『ヴァルキリー号』（ビャルネ船長）に乗って、アイスランド・レイキャビクに行く。  
航路:ヘルシンゲル海岸→カテガト海峡→スカエン岬→スカゲル=ラク海峡→リンネス岬→北海→6月8日ミンガネス島(フェレエルネ諸島)→6月11日ポートランド岬→レイキャビク岬→  
6月13日ファクサ湾内レイキャビク沖到着。フレデリクソン先生の家  
に宿泊。  
案内人としてハンスが紹介される。  
6月14日、持って行く装備品の整理。  
6月15日、フレデリクソンからアイスランドの地図(オラフ・ニコラス・オルセン製作)を貰う。  
6月16日午前6時、レイキャビクからスネッフェルス休火山へ向けて  
出発。  
午前8時、本部教会(アオアルキルキャ)のあるグフネス村に到着・休  
憩→ブランテールの本部教会→午後4時サウベエル分教会(アネク  
シア)→ガルデールの本部教会に到着。農家に宿泊。  
その農家には子供が19人も居た。

6月17日午前5時出発。らい病患者がときどき走って行くのを目撃。  
アルフネタス部落に宿泊。  
6月18日、クレソルプトの分教会に宿泊。  
6月19日、熔岩地帯をすすむ。  
6月20日、土曜日、午後6時小部落ビュディールに到着。ハンスの叔  
父の家で歓待を受ける。宿泊。  
6月21日、小部落スタピの司祭館に到着。一泊。ハンス、3人の人夫  
を雇う。  
6月23日、午前9時、スタピを出発。午後11時、スネッフェルスの頂  
上に到達。寝る。  
6月24日、正午に火口に到着。サクヌッセンムのサインを見つける。  
6月25日、曇り。  
6月26日、雪まじりの雨。  
6月27日、曇り。

下降1日目:

6月28日午後1時13分火口へ垂直降下開始。直径30mの穴を840m。

2日目:

6月29日午前8時半起床。45度傾斜の道。鍾乳石。円天井、石英シャ  
ンデリア。  
午後8時休む。海面下3千m。

3日目:

6月30日、火曜日、6時出発。

12時17分、溶岩道の終点、二股道を東へ進む。

ゴシック式大聖堂の側廊(円天井つづき)→1500m→ロマネスク式アーチ型・天井の低い地下道→南へ8km(深さ400m)。まちがいに気づく

。

4日目:

7月01日、間違った道を終点まで進む。古世代。

7月02日、喉の渇きの一夜。

7月03日、金曜日、炭坑(石炭層)。メタンガス。

7月04日、土曜日、午前6時出発、広い洞窟(高さ45m×幅30m)、袋小路到達。

7月05日、引き返す。水が無くなる。

7月07日、火曜日、二股道の所に戻ってアクセル倒れる。教授の水筒の水の残りをもらう。

7月08日、西の地下道を降りながら水脈を探す。午後6時、岩塊の結晶面で光の祭典。午後10時ハンス、鶴嘴で壁面に穴を開けて水を出す。ハンス川と呼ぶことにする。

7月09日、木曜日、午前8時前進再開。花崗岩の地下道。

7月10日、金曜日、レイキャビクの南東120km、深さ10km。豎穴・断層に到達。

7月11日、断層の螺旋階段を降下。

7月12日、8km降りて合計で海面下2万mに達する。

7月13日正午、断層は南東に向けて45度の傾斜になる。

7月15日、水曜日、地下2万8km、スネップフェルスから200kmに達する。海の真下。

7月18日、土曜日、広い洞窟。深さ6万4km、出発点から南東340km。

7月19日、日曜日、休日。温度27.6℃。

8月07日、深さ120km、アイスランドから800km。アクセル、教授とハンスとはぐれる。落ちて気を失う。

8月09日、日曜日、午後11時アクセル目を覚ます。

8月10日、月曜日、アクセル起床。リーデンプロック海(空の高さ4km)を見る。アイスランドから1400km(!?急に増えている。アクセルの800kmが間違っていたか教授がサバを読んだか?)、南東から方位19度42分西に傾いている。深さは140km。

・航海日誌

8月13日、午前6時ハンスの作った化石木の筏で海に乗り出す。北東からの風。24時間で120kmの速度。

同・正午、巨大な藻、1000mのひばまた。

8月14日、金曜日、北西の風、岸から120km。気温32℃。ハンス、チョウザメを釣る。

アクセル、生きた化石の世界を空想する～巨大な亀ケルシテス、レ

プトテリウム、メリコテリウム、巨大な獏ロフィオドン、アノプロテリウム、マストドン、メガテリウム、プロトピテコス、大きな蝙蝠プロダクティロス。

8月15日、土曜日、陸地が全く見えない。

8月16日、日曜日、鶴嘴を綱で360m下ろしても海底に届かず。怪物の歯形が付く。

8月17日、月曜日、深い所で何かが動いている。

8月18日、火曜日、プレシオサウルスとワニのような魚竜(30m以上)が戦い、プレシオサウルスが死に魚竜(鯨竜)は消えた。

8月19日、水曜日、単調。

8月20日、木曜日、時速14km、高さ150mほどの水柱(間歇泉/ゲイゼル)を上げる小島を見つける。

アクセル島と名付けられる。グラウベン港から1080km、アイスランドから2480kmでイギリスの真下。

8月21日、金曜日、暴風雨、稲妻に見舞われる。湿度が飽和状態で髪の毛が逆立って放電し、マストにセント・エルモの火が見える。帆をあげたまま進む。

8月23日、日曜日、雷鳴で会話が出来ない。雲の表面が発光している。硝酸ガス臭のする火の玉がマストを飛ばし、教授がのびてハンスが口から火を吐いてアクセル自身も気を失う。

8月25日、火曜日、アクセル、一時的に意識を取り戻す。

～航海日誌終わり。

8月26日。

教授もハンスに助けられていた。

食糧の残りは4ヶ月分。コンパスに針が逆方向に向いている(=海の嵐で元の陸地に戻された)ことに気づく。

発見物:5メートルの甲羅(鮮新世の巨大彫歯獣)、有史以前の古代生物の骨、人間の頭蓋骨。

マストドンに住む第四紀と人間の骨。

光る森:第三紀の植物群(シュロ、パルマシット、松、イチイ、糸杉、コノテガシワ、苔、スマハソウ、羊歯)、柏、ユーカリ、樅、白樺、カウリ松。

マストドンの群れを操る身長3mの巨人。サクヌッセンムの頭文字サインと16世紀のナイフ。

教授、その場所をサクヌッセンム岬と名付ける。

洞窟の入り口の岩をどかすために火薬を仕掛ける。

8月27日、木曜日。

火薬に点火。洞窟の裂け目から海水が地下へ流れる。

3人の乗った筏は洞窟の中に流されて、ほぼ垂直に落ちる。

午後10時、流れが上に転じる。暑さが増す。コンパスが狂う。

筏を押し上げているものが水から溶岩流(!?☒)に変わる。

8月28日、午前8時、筏の上昇が一時的に止まる。間歇性の噴火だった。

アイスランドから4千km離れたイタリア、ストロンボリ島(エトナ山)から吐き出される。

8月31日、漁師たちにもてなされ、小さな舳(はしけ)でメッシナ(シチリア島北東部港町)に運ばれる。

9月04日、金曜日、郵船ヴォルテュルヌ号(フランス)に乗る。

9月07日、マルセーユに上陸。

9月09日、ハンブルクに帰還。

学会で論争。

ハンス「ファルヴァル」と別れの挨拶を残してアイスランドに帰る。

<メモ>

☒☒30メートル地下に潜れば1°C上がる。

(→たしか10メートル降りれば気圧は1hPa下がる。地表の標準気圧は1013.75hPa。)

したがって、たとえば3000メートルの地下に降りると気温は100°C上がり、気圧は1313.75hPaになる。)?

☒☒地殻

地下40kmほどまで温度は1300°Cほどになるはずという説。

↑ハンフリー・デービーとリーデンプロックは否定。

☒☒大気圏の最低温度は40~50°C以下にはならない?

(2018年6月29日のナショジオ記事。南極で最低気温-94°Cが記録される。二酸化炭素は-78.5°Cでドライアイスになる。)

☒☒紀行

白夜:アイスランドは6,7月は太陽が沈まない。

風習:アイスランドでは女性が男性客のズボンや靴下を脱がせてくれる。

☒☒英訳

He was devouring Mr Fridriksson with his eyes.

→食い入るように見つめる。目で食べてしまいそう。

☒☒気圧計と圧力計

気圧計は海拔0m、760mmまでしか計測できない。

0m以下では圧力計を使う。

→アクセル。

「16世紀には気圧計も圧力計も無かった。サクヌッセンムはどうやって自分が地球の中心に到達したことを確かめられたのか？」

☒☒710気圧まで地下に降りれば空気が水のように濃くなる。  
アクセル「もっと下に降りたら、それ以上に降りられるか？」  
教授「ポケットに石でも詰めるんだ」

☒☒周囲の事物は人間の脳に現実に影響を及ぼす。  
四方を壁に閉じ込められた者は、しまいには観念や言葉を繋げる能力をなくしてしまう。

☒☒意訳？異訳？

アクセルがあと2千日かかって地球を突き抜けるだろうと言ったのに対するリーデンプロック教授の反応。

“Confusion to all your figures, and all your hypotheses besides,” shouted my uncle in a sudden rage”

→「おまえの計算なんか、くたばっちまえ！」続けて次のセリフに「おまえの仮定なんて、なんだそんなもの…」と続く。

また理解しやすいように分解している。

目を覚ましたアクセルが地底でリーデンプロック海と空を見たとき

° “the sky, if it could be called so, seemed composed of vast plains of cloud,”

→天井、お望みなら空と言ってもいいが、それは大きな雲、つまり絶えず動き変化する水蒸気の層であるらしかったが、…。

訳者が愉快的調子に言い換えている。

分解・言い換えもしている。

☒☒ガジェット

ルームコルフ装置:電気ランプ。

☒☒洞窟の例

・グアチャラ洞窟(コロンビア):深さ750mまでフンボルト氏が確認。

・マンモス洞窟(ケンタッキー):高さ150mの天井、地底湖40kmまで確認。

☒☒リーデンプロック海

・空の高さ4km。

・巨大キノコの森:高さ、笠の直径ともども10~13mが密生して、森の中は真っ暗。

・巨大灌木群:高さ30mのヒカゲノカズラ、封印木、木状羊歯、鱗木~中世代、古世代。

- ・ マストドン、ディノテリウム、メガテリウム。
- ・ 水成岩(原生代のあとに出来た)。
- ・ 広さ推定120kmから160km。

#### ☒☒会話

地球の中心への探検の途中で。

アクセル「叔父さん、ひとつ質問していいですか？」

教授「いいとも、アクセル」

アクセル「それで、帰りは？」

教授「帰り！ああ、おまえは行きつきもしないうちから、帰ることを考えているのか？」